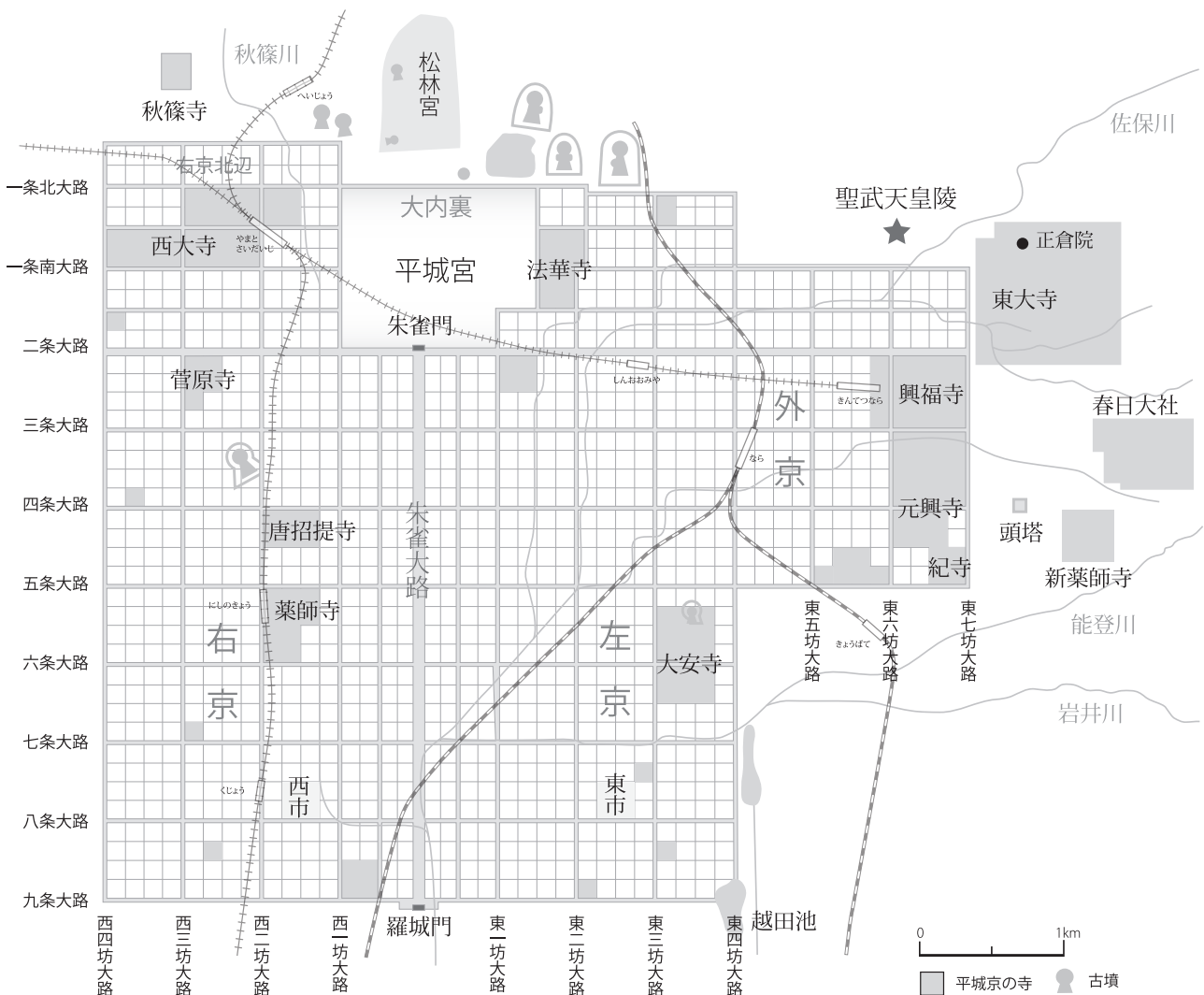


平城京と聖武天皇

奈良の都 平城京

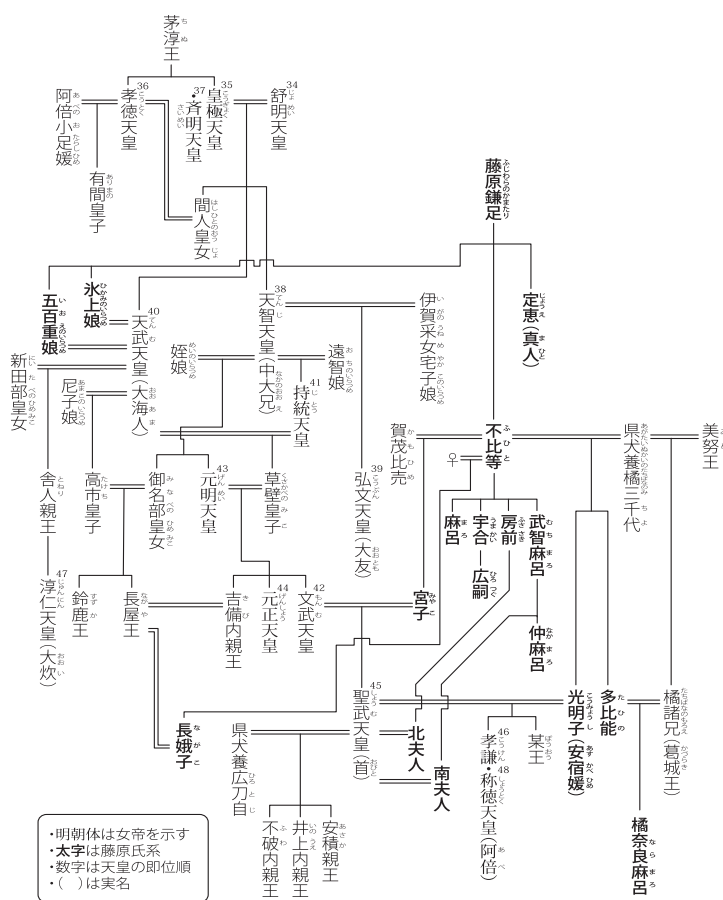
和銅3年(710)に藤原京(奈良県橿原市)から遷都された平城京は、奈良盆地北端、現在の奈良市及び大和郡山市にまたがる地域に造営されました。南北約4.8km、東西約4.3km(外京などを含めると6.3km)と広大な都市は、唐の都長安を真似て条坊制が採用され、中央を南北に走る朱雀大路によって右京と左京に分けられ、各京内は東西・南北に張り巡らされた大小の路により条坊に区画されています。都に住んでいた当時の人口は約20万人とも推定されています。平城京は、天皇を中心とする律令国家体制を確立するための都市であるとともに、仏教に基づく国家支配の実現を目指した仏教都市でもありました。都には、鎮護国家の象徴として大官大寺、薬師寺、元興寺が藤原京より移転され、寺はまさに都を構成する重要な機関として位置づけられていました。一方で、霊亀2年(716)には「寺院併合令」が出され、地方寺院の統制や荒廃した寺の修造が全国的に行われました。



聖武天皇の苦悩

首皇子（聖武天皇）は、大宝元年（701）、文武天皇と藤原不比等の娘宮子との間に生まれ、養老8年（724）に元正天皇から皇位を譲り受け天皇に即位しました。

平城京の整備が続く中、天皇即位後に、様々な出来事が起こり始めます。聖武天皇と夫人の光明子との間に誕生した某王が満1歳ごろに亡くなってしまい、皇位継承の問題が起こります。そして、国内では相継いで飢饉や干害、大地震による災害、疫病が流行し、人びとは苦しみの中にありました。朝廷では政治の中心にいた藤原四兄弟（故藤原不比等の子、武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が天然痘で亡くなり、その後の橘諸兄政権では支配者層が分裂してしまいます。この状況に追い打ちをかけるように聖武天皇の従兄弟にあたる藤原広嗣が九州の大宰府（福岡県）で反乱を起こす事件が発生します。天皇は深刻な悩みを抱えているなか、天平12年（740）に都を平城京から恭仁京（京都府）へ移し、仏教による統治を目指します。



天皇と藤原家系図



佐保山南陵（聖武天皇陵）



佐保山東陵（光明皇后陵）

聖武天皇と光明皇后の御陵は、東大寺の西北西、興福寺の北に位置する佐保山に並んで造られました。